

未来の医療～Healthcare as a Service～と第一三共の目指す姿

眞鍋淳氏

(第一三共株式会社代表取締役社長兼CEO社長執行役員)

当社は、ルル、ロキソニンS、ガスター10等をCMで流しているのですが、かぜ薬等の会社と思われているが、メインの事業は新薬である。ワクチンについては、新型コロナウイルス感染症のmRNAワクチンの開発も行っている。第一三共のPurposeは「世界中の人々の健康で豊かな生活に貢献する」ことであり、少子高齢・人口減少社会では、健康で長く、生き生きとした生活を送ることが重要である。Society5.0時代のヘルスケアは、病気の治療から未病ケア・予防へ、画一的な治療から個別化へ、医療関係者中心から個人の主体的な関与へと変化していくだろう。国としても、全国医療情報プラットフォームの創設、電子カルテ情報の標準化、診療報酬改定DXの3つを掲げて、取り組んでいる。

また、COVID-19のパンデミックによって、情報科学の活用が社会から求められ、動きが加速している。例えば、藻類や細菌に薬剤を装着させたマイクロロボットに関する研究、ロボットによる全自動手術の臨床試験の動き、メタバースや複合現実（MR）とAIの活用による次世代オンライン遠隔医療システムなどが挙げられる。今、製薬業界はAI技術を用いたデータ活用によるコストの削減や業務効率向上に取り組んでいる。さらに、デジタル関連企業との協業や産官学の取り組みも行っている。さらに、海外ではデータ利活用を目的とした多くのエコシステムが既に存在して、欧州では、国を跨いだデータ利活用の取り組みが進んでいる。米国ではグーグルやアマゾン等のプラットフォーマーや、民間保険会社によるエコシステムの構築が進んでいる。

これからは一人一人のLife Journeyに寄り添って、産まれてから最期までの個人のデータを測定・分析し、最適なモダリティやヘルスケアソリューションが提供される世の中になっていくだろう。第一三共としては、個人に提供されるモダリティとして、低分子医薬品、抗体医薬品などだけではなく、mRNA、遺伝子治療、細胞治療等を提供し、さらにデジタルソリューションなども提供していく。2025年ビジョン「がんに強みを持つ先進的グローバル創薬企業」を実現して、核酸医薬、遺伝子治療、細胞治療といった新しいモダリティをはじめ次世代の創薬に挑戦していく。

デジタル治療ソリューションもモダリティの一つとして位置づけている。デジタル治療ソリューションには、がんの周辺症状や医薬品の副作用の低減による患者さんのQOLの向上及び治療効果の向上を期待している。現在、Life Journeyにおける各種健康・医療・生

活データは分散しているが、データを個人単位で集約し、プラットフォーム上で共有、活用することによって、健康サポートやケア、QOL向上などの最適なサービスを受けることができるようになる。データの利活用の目的は、新たな製品やサービスの開発にとどまらない。現在、第一三共は新たな治療法の開発だけではなく、DXの推進によって、データ駆動型経営の実現と先進デジタル技術による全社の変革の取り組みを進めている。一人一人に寄り添ったHealthcare as a Serviceを追求するためには、先端・新興・革新的技術の具現化と、健康医療ビッグデータの利活用を実現して、健康・医療領域の様々なプレイヤーが協調するトータルケアエコシステムの構築が必須になる。